

## 使徒の働き20章24節 「恵みの福音」

### 1A エルサレムに向かうパウロ

1B 同胞に対する証し

2B 兄弟さえ受け入れない恵み

### 2A 律法に拠らない義

1B 聖なる、正しい律法

2B 霊的な律法

3B 悪を行っている自分

4B キリストの義の行い

5B 律法の要求を満たされた方

6B 悔い改め、信じる証し

7B 御霊による洗い、新しい歩み

## 本文

使徒の働き20章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、19章まで来ました。午後に20章を一節ずつ見て行きたいと思います。今朝は、24節に注目します。「**24** **けれども、私が自分の走るべき道のりを走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音を証しする任務を全うできるなら、自分のいのちは少しも惜しいとは思いません。**」自分の命が惜しいことはないと言わせた、パウロが証言していたのが、恵みの福音です。

### 1A エルサレムに向かうパウロ

20章は、パウロとその一行が、エルサレムへの旅を急いでいる場面であります。前回、私たちは、エペソでの宣教をパウロが行ったところを見ました。そこから、ギリシアのほうに行き、そしてエルサレムに向かっています。船を乗り継いで、今、ミレトという町にいます。エペソから南に約50<sup>キロ</sup>離れたところにあります。けれども、パウロは、できたら五旬節までにエルサレムに行きたいと急いでいました。それで、自分がエペソに行くのではなく、エペソにいる教会の長老たち、指導者たちを呼び寄せて、そこで別れの挨拶をしたのです。エルサレムでは、「20:23 **鎖と苦しみが私を待っている**」と聖霊によって示されていました。エペソの長老たちにも、もう二度と、顔を合わせる事ができないとまで思っていました。そこで、最後の言葉になるであろうつもりで話したのです。

### 1B 同胞に対する証し

パウロが、エルサレムに行きたいと願ったのは、ユダヤにいる貧しい兄弟たち、仲間に、異邦人からの支援を送るためです。また、それだけではなかったでしょう。彼はエルサレムに行って、神殿の敷地にいるユダヤ人たちに、彼らの言葉であるヘブル語で、自分がどのように主イエスに出

会ったのかを証言しました。パウロは、エルサレムにおいて律法を学びました。厳格なパリサイ派でした。ユダヤ人の最高法院であるサンヘドリンの一員であると考えられます。その熱心さは、この道と当時呼ばれていた、キリスト者を迫害するほどだったのです。それは異端、あつてはならない教えだと思いました。ですから、彼らがなぜ、イエス・キリストの良き知らせ、福音に対して敵対的になるのかをよく知っていました。自分がまさに、その敵愾心を持っていたのですから。

しかし、パウロは、キリスト者を捕縛するためにダマスコに向かう途中で、復活のイエスに会いました。光り輝くイエス様に語られ、彼は目が三日間、見えなくなりました。そこで回心したのです。彼は知りました。自分たちが信じている律法と預言者、すなわち旧約聖書はイエスにあって成就したのだと。律法と預言にあるキリストについての事柄は、イエスにあって実現したのだと知ったのです。パウロは、律法を隅々まで知っていたがゆえに、すべてがそれで完成したことを知ったのです。「マタ 5:17 わたしが律法や預言者を廃棄するために来た、と思つてはなりません。廃棄するためではなく成就するために来たのです。」これはまるで、パソコンがすべてそろっているのに、肝心の CPU がなかったのと同じです。ですから、この方がキリストであることを知ったパウロは、ユダヤ教会堂、シナゴグにおいて、ユダヤ人たちと論じ合つて、力強くイエスがこのキリストであることを証言することができました。

## 2B 兄弟さえ受け入れない恵み

けれども、パウロも、そのことを行つたら強い反対が来ることは分かっていました。聖霊は、前もつて、鎖と苦しみがついてくると語っておられました。実は、エルサレムにいる教会の人たち、兄弟たちには、パウロについてはそれほど友好的ではなかったのです。パウロが、神が恵みによって人を救うのだ。律法の行いによってではなく、イエスを信じる信仰によって義と認められるのだと教えていたからです。異邦人も、割礼を受けることなく、律法を守ることなく、信じることによって救われるのだと教えていたからです。それが、律法を守ることに命をかけていたユダヤ人たちには、なかなか受け入れられるものではなかったのです。パウロとバルナバが、このことに決着をつけるためにエルサレムに来たことを思い出してください。異邦人も、割礼を受けて、モーセの律法を守らなければ救われまいと言ひ出した者が出てきて、それで激しい論争になり、ペテロが立ち上がり、恵みによる救いを語り、ヤコブが立ち上がつて、異邦人に律法を課してはならないと言つて、ようやく収まつたのです。

## 2A 律法に拠らない義

しかし、パウロは、神によって啓示を受けた恵みの福音を、一歩たりとも妥協することがなかった、たとえ殺されたとしても、それでよしとするとまで決めていた、その福音とはどれほどまでに貴いものなのでしょう？ 律法を生半可ではなく、とことん学び、実践しようとしたパウロだからこそ、その恵みが命よりも貴いと思つたのでしょうか？「詩篇 63:3 あなたの恵みはいのちにもまさるゆえ私の唇はあなたを賛美します。」いのちにもまさる神の恵みとは、一体何なのでしょう？

### 1B 聖なる、正しい律法

聖書にある神の律法、掟は、いわゆる、道徳や規律のようなものではありません。宗教においては、これこれを行えば、あなたは善い人になれますということを教えます。これこれを行いなさいと、神は命じられますが、その命令を通して、神ご自身がいかに聖い方か、正しい方を示すものなのです。パウロは、ローマ人への手紙 7 章でこう教えています。「7:12 ですから、律法は聖なるものです。また戒めも聖なるものであり、正しく、また良いものです。」ユダヤ人は律法が与えられたので、それを守るべく日々、努めていますが、しかし、その中で、神が聖なる方で、正しい方、良い方であることが明らかにされていくのです。

確かに、自然の中にも神がおられることは、啓示されています。その美しい自然を見れば、それを造られた方がおられることを認めることができるし、また大きな嵐が来て、雷が落ちれば、畏怖の念を抱きます。また、人々に良心を与えておられます。善と悪の判断をすることのできる、温度計みたいなものを私たちの心に入れてあります。しかし、神はさらに、ご自分が語られることによって、ご自分の選ばれた民、イスラエルによって、ご自分の姿を明らかにされました。それが聖書です。もやもやとした存在が、まるで鏡に映し出されたように、神が誰であるかを律法や預言を通して知ることができます。

### 2B 霊的な律法

ですから、ユダヤ人は、自分が神を知っていると自負していました。異邦人は、神は知らないが、私たちは律法を持っているから知っていると自負していました。特に律法学者や、厳格に律法を守ろうとしていたパリサイ派は、そう思っていました。ところが、イエス様はとんでもないことを語られました。「マタ 5:20 わたしはあなたがたに言います。あなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の御国に入れません。」あれだけ厳格に守っているパリサイ人たち以上の正しさを持っていなければ、天の御国に入れないと言われているのです！そして具体的にイエス様は、律法の意図していることを説き明かされます。「殺してはならない」というのは、兄弟、仲間に対して「バカ」と言ったら、それだけで最高法院、神の裁きの座に連れて来られて、裁かれると言われました。つまり、地獄に行くということです。そして、「姦淫をしてはならない」というのは、女を見て、情欲を抱いたら、それで燃える火の池に投げ込まれると言われているのです。そうです、律法は、形だけを守るものではないのです。それを守る姿勢、内なる姿勢も含めて語られているものなのです。ですから、「ロマ 7:14 律法が霊的」なものであるとパウロは言っています。

### 3B 悪を行っている自分

そうすると分かってくるのが、自分がいかに罪深いか、ということなのです。自分が律法を行っていることによって義だと思っていたのが、ことごとく汚れているということが分かるのです。今まで

は、この律法は守っていると思っていたところが、自分はまるで守れていない、ことごとく違反していることが分かるのです。神が圧倒的に正しく、聖なる方で、自分が圧倒的に罪深いことが分かります。彼は、「ロマ 7:13b 罪は戒めによって、限りなく罪深いものとなりました。」と言いましたが、彼はとてつもなく自分が罪深いことを知ったのです。

私は大学生の時に信仰を持ちましたが、その時に同じキャンパスにクリスチャンの先輩がいました。その一人がどのように信じるようになったか話してくれましたが、中学生の時に論語を読んだそうです。そこに書いてあることを、一定期間、実践してみようと思い立ったそうです。その期間が終わり、確かに実践できたそうです。そこで気づいたのが、実践できたと誇っている、高慢な自分だったそうです。戒めを行っても、罪が溢れるようになってきて、がんじがらめになってしまいます。

パウロは、律法に熱心であったゆえに、あからさまな罪を犯しました。彼は、キリスト者を迫害したのです。キリストの弟子たちに暴力をふるい、冒瀆する言葉を言うように仕向けていました。いわば、宗教の過激派、テロリストです。律法を守り、神に仕えていると思いながら、実は、神を冒瀆する者、人殺しであったのです( I テモ 1:13)。そこで彼はこういったのです。「1:15「キリスト・イエスは罪人を救うために世に来られた」ということばは真実であり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。」罪人のかしらだと言っています。

#### 4B キリストの義の行い

ですから、自分で自分を救うことができないことに気づきます。それはあたかも、自分で髪の毛を引っ張って空中に浮かぼうとするような徒労であるし、何十<sup>1</sup>もある深い縦穴の底にいて、自力で這い上がろうとしているようなものであり、全くできないのです。それで神は、人が自分で救えないことを知っておられて、全くの憐れみで、ご自分の恵みによって、人を救うようにしてくださいました。それは、ご自分の独り子をこの地上に送り、人間にはできなくなっていることを、この方が行うようにされるためです。

その救い主をキリストと呼び、イスラエルのナザレ出身のイエスが、その救い主、キリストなのです。福音書を読めば、イエス様がいかに正しい方であるかが分かります。そこに不義や欠点を見いだすことはできません。けれども、この方は憐れみ深い方で、人の弱さに同情できない方ではありませんでした。しかし、ユダヤ人の宗教指導者の妬みをかい、ローマの極刑である十字架刑につけられることとなります。ところが、三日目によみがえられたのです！この方を、自分を罪から救う方として呼び求め、心で信じて、この方が主であると言い表すならば、救われます。自分で自分を救う代わりに、神がキリストにあって救いを提供してくださったのです。これが恵みです。

恵みとは、「一方的に与えられる好意」という意味です。自分が好かれるために、何かを行うのではなく、ただ好きだから良くして下さるということです。神はご自分の憐れみによって、私たちが

何かをしたから、ではなく、一方的に愛してくださり、全く受けるに値しない好意を受けているのです。最も嫌がられる罪人も神が愛しておられるというのは、真実なのです。

#### 5B 律法の要求を満たされた方

パウロは、律法の厳しさをよく知っていました。律法に背く者は死ななければならない、という定めを知っていました。それで、自分が律法に背いている者、罪犯した者であることを知ったのなら、もう救いはないのではないかとされます。彼も一度、絶望して、「ロマ 7:24 私は本当にみじめな人間です。だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」自分は死ななければならない罪人だ、と悟ったのです。

しかし、イエス様が、ローマの十字架によって処刑されたこと、それは、私たちの罪を身代わりに受けてくださったことであることが、明らかにされました。ご自身のいのちよって、それを身代金にするかのように、罪のかんじがらめに生きてきた私たちを、そこから解放してくださったのです。律法の要求である死を、身代わりに受けてくださったのです。「ロマ 8:3 神はご自分の御子を、罪深い肉と同じような形で、罪のきよめのために遣わし、肉において罪を処罰されたのです。」だから、もはや律法を守り行わないことによって、自分は裁かれて、死ななければいけないという恐怖から、私たちを解放してくださいました。神がすでに、愛するご自分の子にあってその罰を自ら受けるようにしてくださったのですから。

#### 6B 悔い改め、信じる証し

ですから、私たち人間に必要なことは、ただ一つです。それは、神の愛に応答することです。神がご自分の子を私たちの罪の身代わりにするほどに愛してくださった、その愛に気づいて、応答することです。パウロは、エペソの長老たちにこう言いました。「<sup>21</sup> ユダヤ人にもギリシア人にも、神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信仰を証してきたのです。」神に対する悔い改めと、主イエスに対する信仰です。

悔い改めとは、思い直すことです。神に背いていたところから、思い直して、神に向かうことです。思い出します、私が初めて本気で祈った時、それは大学一年生でした。自分の人生が、いかにずれているか、挫折を通して強く感じました。それで、教会で語られている神がもしいるなら？と思ったのです。祈りました、「神さま、生まれたときからあなたをずっと無視してきました。ごめんなさい。」と。すると、こんな惨めな自分を、頭のとっぺんからつま先まで包んで、受け入れてくださる神がおられることを知ったのです。涙を流して、「ありがとうございます！」と祈りました。それが、19歳の時のクリスマスで、間もなくして正月になりましたが、初詣に行く代わりに、教会の食事会に行きました。すると、「清正くん、なんか、柔らかくなったね」とか言われたのです。ちょっと気持ち悪い！と思いました。何も変わっていないのに、と思いましたが、神が変えておられたのでしょう。

このように、神に背いていたところから、神のほうを向きます。そして、主イエスを信じるのです。この方が、自分を罪から救ってくださる方である。自分の罪のために死なれ、三日目によみがえってくださった。このイエスを自分の人生の主にするということです。「ロマ 10:9-10 なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせたと信じるなら、あなたは救われるからです。10人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。」信じるとは、信頼するといったほうがいでしょう。イエス様に、自分の人生をあずけることです。

信じると信頼することの違いを喩えて説明します。ある綱渡りの天才がいました。彼は、どんな困難な綱渡りでもやり遂げた人です。上に重いものを担いでも平気で渡れます。そのことを人々はよく知っています。それで、こう尋ねます。「この人が誰かを背負って綱渡りをしたら、成功すると思いますか？」答えはみな、「はい！」でした。「それでは、この人に背負ってもらって、綱渡りをしてもらいましょう。誰が背負ってもらいますか？」すると、みな、成功すると同意していたのに、だれも、申し出ません。その中で一人だけ、手を挙げた人がいるとします。その人が応答したんですね。信頼しているのです。

#### 7B 御霊による洗い、新しい歩み

このようにして、神に対して悔い改めて、主イエスに対する信仰を抱くなら、救われるのです。神は、ご自分の霊、御霊を信じる者にくださいます。もはや、自分の力で律法を守る生活ではなく、神の霊によって心と思いが一新されます。新しくされた心によって、御霊に従って、神の命じることを行うことができるようになります。もはや、律法を守らなければ罰せられると恐れるのではなく、神にこれだけ愛されているのだから、この方の言われることを守りたいという、愛の動機で生きることができるのです。愛は、すべてを捨てる用意ができます。パウロのように、キリストの愛に駆り立てられたら、自分の命も惜しまないというほど、神に従うようになるのです。